

今の現場教員は何にストレスを感じているか？

—アンケート調査を踏まえて—

末田恵子* 大石英史

What causes the stress of today's teacher? : Based on the questionnaire

Keiko SUETA Eiji OHISHI

(Received September 26, 2003)

1 問題と目的

学校週五日制の導入、総合的な学習の時間や少人数制の実施など、21世紀を迎えて教育現場が大きく変化している。しかし、現場の教員の87%がこのような教育改革に「速すぎる」と感じている(朝日新聞2002.9.22)。また、現場をとりまく社会も大きく変化してきた。経済グローバル化の影響で経済格差が開き、階層構造が変化した。ごく少数のエリートを除き、若者の身近な大人モデルが消失した(佐々木2002)。リストラや給与の減額といった問題の、家庭への影響も大きい。学校間競争もある中、家庭の経済格差が学力差につながるのではないかという意見もある(朝日新聞2002.10.23)。このような変化の中で教育に携わる教員は、時代の変化に合わせて、柔軟に目の前の子ども達に対応していかなければならない。高学歴＝高収入といった価値観は崩れ、何のために学ぶのかといった教育の目的が問われなおす現在において、教員の立場はもはや過去のような聖職者ではない。今年度の文部科学省の発表では初めて数が減ったとはいえ、不登校者数は今なお13万人を超えており、学力の低下についての論争も盛んである。また、最近では中学生や10代の少年達による殺人などの重大な事件も起きている。教育に関する問題や課題が山積みであるといえる。

家庭に関してみると、学校に対してはしつけやマナーなど家庭ですべき問題を解決してもらおうと過度に依存する面が見られることがある。一方で、「個人の自由」や「権利」などを前提に、学習の進め方や、学校内の様々な問題に対して、些細なことでも批判するといった学校へ強い不信感を抱く面もある。一人の保護者の中に学校に対して依存と不信感という自己矛盾が見られることもある。佐々木(2002)によると保護者から教師への要求は三つあるという。それらは学力、しつけ、託児である。託児要求というのは、「子どもが夜間外出しているのに、親がそれに無関心」、「問題生徒の親に電話連絡したら『そちらで適当に処理して』といわれた」というような親の養育放棄のようなものである。

最近では現職の教員が様々な問題を起こし、そのことがマスコミに取り上げられることにより、社会からの風当たりが強くなったとも言える。このように学校の外から教員にストレスを与える状況が多くある。学校内でも仕事の多忙化、教員同士の人間関係、問題を抱える子どもへの対応など、ストレスを感じる状況が数多くある。欧米の教員と比較すると、日本の学校の

* 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修

教員は仕事にかかわる時間が長いといえる。これは、日本では学校が「勉強を教える」という役割以外に、児童生徒にしつけやマナーを教えたり、相談事に応じたりと教員の仕事が多岐にわたり、部活動のように、勤務日や時間を越えて勤務することもあるからである（朝日新聞 2002.9.22）。

文部科学省の発表によると平成13年度の教員の病気休職者数は5,228人で、全在職者数の0.56%である。そのうち、精神性疾患による休職者数は2,503人で、病気休職者数の47.9%を占めている。人数、割合ともに年々増加している。図1は病気休職者数と精神性疾患による休職者数の変化を表したものである。しかし、これは氷山の一角で、一部の実態を表しているにすぎないことに留意しなければならない。長期休職にはいたらなくても、出勤に多少なりとも支障をきたす不適応事例はどここの学校でも見られるとあってよい（中島1998）。全日本教職員組合の調査によると、実際に、「学校をやめたい」と答えたのは、「時々思う」「よく思う」を合わせると53%、過労死の不安についても「人ごとでない」「現実の不安」を合わせると58%にのぼる（朝日新聞 2003.2.16）。これらのことから教員は、大きなストレスにさらされている者が多いといえるのではないだろうか。

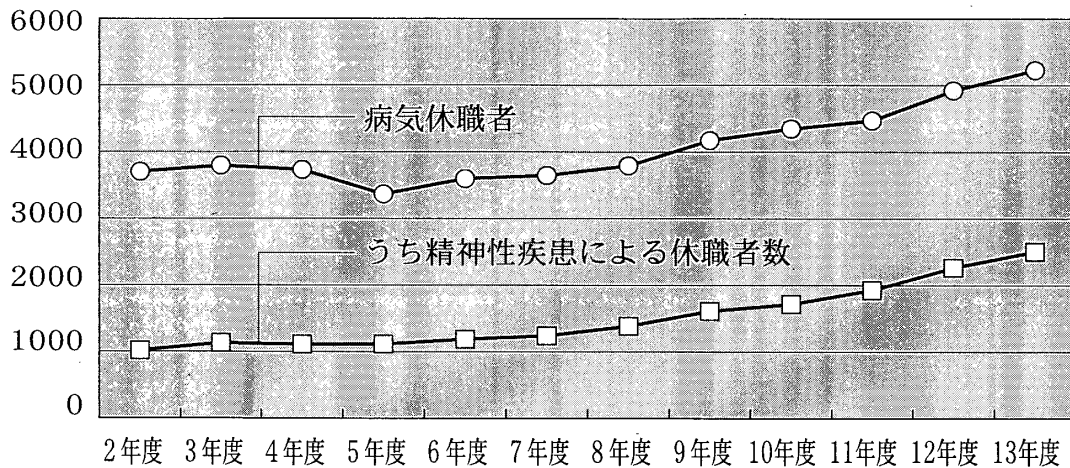


図1 病気休職者数の変化

諸富（2002）によると現場の教員の悩みは大きく分けて3つある。一つ目は子どもとの関係、二つ目が現場の教師同士、あるいは管理職との人間関係、三つ目が「困った親」との付き合い方である。学校現場に勤務しているとこれらのことは、休憩時間や放課後、よく話題に出る。現場の教員は具体的にどのようなことで悩んでいるのか、また、どのようなことでストレスを感じているのか、質問紙からその傾向を探っていくことが本研究の目的である。

2 方法

(1) 調査対象および実施時期

A国立大学の認定講習に参加した小学校の教員100名、中学校の教員28名、高校の教員16名、養護学校の教諭7名、養護教諭は39名。計192名。

実施時期は2000、2001、2003年、それぞれ8月中～下旬である。

仕事上の悩みやストレスに感じることにについて「教員として今現にどんなことにストレスを感じていますか。（子どもとの関わり・ケース、保護者との関わり・ケース、他教員との関係

等) 差し障りのない範囲で教えてください。」と教示し、自由記述してもらい、KJ法で分類した。

3 結果

全教員の記述の中で最も多かったのが「児童生徒」に関する悩みだった。次いで、「教員同士」、次に「保護者」に関するものの順だった。表1は全教員の悩みを感じる対象を、それぞれ、「児童生徒」、「教員同士」、「保護者」、「その他」に分け、それぞれの実数と合計との割合を表している。

表1 校種別教員の悩みの対象

	児童生徒		教員同士		保護者		その他		合計
小学校	51人	51.0%	17人	17.0%	21人	21.0%	11人	11.0%	100
中学校	15人	53.6%	8人	28.6%	1人	3.6%	4人	14.3%	28
高校	11人	68.8%	3人	18.8%	1人	6.3%	1人	6.3%	16
養護教諭	16人	41.0%	15人	38.5%	2人	5.1%	6人	15.4%	39
養護学校	4人	57.1%	1人	14.3%	1人	14.3%	1人	14.3%	7
合計	97人	51.1%	44人	23.2%	26人	13.7%	23人	12.1%	190

(1) 小学校教員のストレス

それぞれの校種別に見ていくと、「小学校」の教員100名のうち、ストレスを感じる割合が最も大きかったのは、「子ども」に対してのもので、51名いた。その中で「知的な障害のある子が、好きな子どもを追いかけ、ストーカー的な行動をとる。」(2002 女教諭)、「入学時から多動傾向があり、席につかないことが多く、目が合わない。」(2002 女教諭)といったLDやADHDなどに限らず、『特別な支援を必要とする子ども』に対する記述が多く、11名だった。また、「1年生。自分の思い通りにならないとすぐに大声でわめいたり、床や壁をけったりして授業を妨害する。」(2001 女教諭)、「6年生。自分にとって楽な、楽しいことしかやろうとしない。」(2001 男教諭)など、『自己中心的な子どもがいる』。または、「友人がほしくて金銭、物で仲良くする方法をとる。」

表2 児童に関するストレス

内 容	人数
特別な支援を必要とする子どもがいる	11
思い通りにしないと気がすまない子どもがいる	7
友人関係が作れない子どもがいる	7
不登校・不登校傾向の子どもがいる	6
小規模校なので順位が固定化している	3
いじめ	3
同じことを繰り返す	1
個人の指導を重視するか、集団重視か	1
教員の指導が伝わりにくい	1
指導が裏目に出た	1
良い子の息切れ	1
無気力な子どもがいる	1
偏食がひどい子どもがいる	1
性的いたずら	1
男女の力関係の差	1
キレる子がいる	1
服装	1
友達に怪我をさせた子どもがいる	1
教員への反発	1
転入生の不適応	1
合 計	51

(2002 女教諭)、「6年生。女子集団の心理、人間関係、仲間意識の難しさを痛感している。」など『友人関係がうまく作れない子どもがいる』がそれぞれ7名ずつだった。特に高学年になると女子への対応が困難になってくるようだ。『不登校児童や不登校傾向児童への対応(6名)』などもあった。『いじめへの対応』、『小規模校で子どもの人間関係や順位が決まっている』がそれぞれ3名だった。後は1名ずつだった。表2は内容と実数をあらわしている。

次に「保護者」に対してストレスを感じる教員が20名いた。このうち「子供同士の喧嘩が親同士の険悪な関係につながった。」(2001 女教諭)というような『保護者同士の人間関係』、「親がわが子中心・我が家中心」(2001 男教諭)といった『自分の子どもしか見えていない』、「教員が良かれと思ってしたことが、ある保護者は肯定的に受け止め、ある保護者は反感を抱き…」(2000 女教諭)といった『価値観の多様化』がそれぞれ4名だった。次いで、「学校の存在そのものを否定」(2001 女教諭)など『学校への不信感』が3名、『学校に協力しない』が2名だった。残り『連絡のとり方が難しい』、『保護者の職業が子育てに支障をきたす』、『家庭環境が複雑』が1名ずつだった。表3は保護者に関するものの内容と実数を示している。

表3 保護者に関するストレス

内 容	人数
自分の子どもへの関わり方	5
保護者同士の人間関係	4
価値観の多様化	4
学校への不信感	3
学校に協力しない	2
連絡の仕方	1
保護者の仕事の内容	1
家庭環境が複雑	1
合 計	21

「教員」に対しては「経験年数の差があり、他のアプローチは受け付けてもらえない。」(2001 男教諭)というような、『連携がとりにくい』が10名、『価値観の相違』が4名、『共通理解がしにくい』が2名、『相性が合わない』が1名だった。また、その他に「行事などによる」『多忙』、『保護者と教員仲間の両方の対応にストレスを感じる』、『校務分掌が多い』のそれぞれに3名ずつの記述があった。表4は教員に関するものの内容と実数を示している。表5はその他に関する内容である。

表4 教員に関するストレス

内 容	人数
連携がとりにくい	10
価値観の相違	4
共通理解がしにくい	2
相性	1
合 計	17

表5 その他

内 容	人数
時間が取れない	3
保護者と教員の両方	3
校務分掌	3
学校のシステム	1
子どもも教員もやる気がない	1
合 計	11

(2) 中学校教員のストレス

中学校の教員28名のうち15名が「生徒」に関するストレスについて記述していた。「行事には参加するが終わると不登校」(2002 女教諭)、「学級開きの際には2名だった不登校が2学期にはさらに2名増え、3学期の初めにはさらに1名が不登校。学校に行きたくないといいながらも一応登校してくる生徒が2名。それぞれタイプが異なる。」(2002 女教諭)というような『不登校・不登校傾向の生徒への対応』は3名、「深夜遊びまわる。万引き、喫煙、窃盗を繰り返す。」というような『問題行動』、「何もできてない。していない。」といった、『やる気がない生徒がいる。』はそれぞれ、2名だった。残りはそれぞれ一人ずつだった。以下、表6に示す通りである。

表6 生徒に関するストレス

内 容	人数
不登校・不登校傾向	3
やる気がない	2
問題行動	2
指導がひいきととられる	1
自己中心的な生徒	1
いじめ	1
学級の雰囲気固定化	1
落ち着きがない	1
特別な支援を必要とする生徒がいる	1
友人関係	1
精神的に不安定な生徒がいる	1
合 計	15

次に『教員』に対しては「担任のやりたい放題で生徒への指導がばらばら」(2000 男教諭)というような『共通理解がしにくい』が4名、「力のある男性教員が担任を飛ばして指導する。」といった『連携がしにくい』が3名、『人間関係作り』が1名だった。「保護者」に対しては『注文が多い。』ということあげた教員が1名いた。その他として『多忙』が2名、『生徒数が多いので指導が行き届かない』、『不自然な校則』がそれぞれ1名だった。表7は教員に関するもの、表8は保護者に関するもの、表9はその他を表している。

表7 教員に関するストレス

内 容	人数
共通理解しにくい	4
連携がしにくい	3
人間関係作りが困難	1
合 計	8

表8 保護者に関するストレス

内 容	人数
注文が多い	1
合 計	1

表9 その他

内 容	人数
多忙	2
生徒の人数が多い	1
校則	1
合 計	4

(3) 養護教諭のストレス

養護教諭39名のうち「子ども」に関する悩みについての回答は16名、「教員」に関する悩みについては15名であった。子どもに関しては「ADHDと思われる子どもがいる。」(2002)、「風が吹くと怯える子どもがいる。カウンセリングを受けている。」というような『特別な支援を必要とする子どもへの対応』が4名、『保健室登校』、『不登校』、『子ども同士の間人間関係』、『自己中心的な子ども』、『身体的に気になる子ども』がそれぞれ、2名ずついた。表10に内容を示す通りである。

表10 子どもに関するストレス

内 容	人数
特別な支援を必要とする子どもがいる	4
保健室登校	2
不登校	2
子ども同士の間人間関係	2
自己中心的な子ども	2
身体的な問題を抱える子	2
マナーを守れない子	1
子どもへの関わり方	1
合 計	16

教員に関しては、「保健室登校の女子生徒との関わりで担任との連携がうまくいかず、苦勞した。」(2002) というような『連携のとり方』が9名、『指導が厳しすぎる』、『教員同士の間人間関係』がそれぞれ2名、『担任の指導』、『価値観の相違』が1名ずつだった(表11)。「保護者」に関しては、『父母の意見の相違』、『ネグレクト・虐待』が1名ずついた(表12)。

「その他」として、「神経が疲れている子ども達に対してあいまいさやいい加減さは時には必要。」(2001)、「元気な子どもが来て話ができる場所であっていいのではないか。」(2001) などと『他の教員に保健室の利用を制限されてしまう』が3名、『校内に問題に対応できるような組織がない』、『保護者や子どもの善悪の判断がゆるい』、『保護者と担任の間人間関係が良くない』が各1名ずつだった(表13)。

表11 教員に関するストレス

内 容	人数
連携がとりにくい	9
指導が行き過ぎる教員がいる	2
人間関係	2
担任の指導のあり方	1
価値観の相違	1
合 計	15

表12 保護者に関するストレス

内 容	人数
父母の意見の相違	1
ネグレクト・虐待	1
合 計	2

表13 その他

内 容	人数
保健室の使用を制限される	3
子どもを支援する組織がない	1
善悪の判断がゆるい	1
保護者と担任の関係の悪化	1
合 計	6

(4) 養護学校の教員のストレス

養護学校の教員は「子ども」に関してストレスを感じている者は4名だった。『神経過敏な子への対応』、『難病を抱えている子どもへの対応』、『指導がしにくい』、『学級に適応できない』がそれぞれ1名ずつだった（表14）。

表14 子どもに関するストレス

内 容	人数
過敏	1
神経性の難病	1
指導しにくい	1
学級に適応できない	1
合 計	4

「教員」に関しては『価値観の相違』が1名だった。（表15）「保護者」に関しては『生活環境が不適切』が1名だった（表16）。

表15 教員に関するストレス

内 容	人数
価値観の相違	1
合 計	1

表16 保護者に関するストレス

内 容	人数
生活環境	1
合 計	1

(5) 高校教員のストレス

高校の教員16名のうち「生徒」に関する記述があったものは11名だった。「保健室にいる時間が長い女生徒がいる。」（2002 男教諭）という『不登校傾向』、「髪を茶髪にし、ベッカムの髪型をまねしてくる。」（2002 男教諭）というような『反抗や非行などへの指導の難しさ』、「パシリ的な関係が気になる。」（2002 男教諭）といった『生徒同士の間人間関係』がそれぞれ2名ずつだった。『個人差に応じた指導のあり方』、『喫煙』、『部活動』、『技能教科への意欲の低下』、『男女交際』が1名ずつだった（表17）。

表17 生徒に関するストレス

内 容	人数
指導の困難さ（非行・反発）	2
不登校傾向	2
生徒同士の間人間関係	2
個人差	1
喫煙	1
部活動の悩みへの対応	1
技能教科への意欲の低下	1
男女交際	1
合 計	11

「教員」に関する悩みは、『校種を超えた連携が必要』、『力量が不足している教員がいる。』、『連携が必要』などがあった（表18）。

表18 教員に関するストレス

内 容	人数
校種を超えた連携	1
連携がしにくい	1
力量不足の教員	1
合 計	3

「保護者」に関しては『生活環境』が1名だった（表19）。「その他」には『外部機関との連携』が1名だった（表20）。

表19 保護者に関するストレス

内 容	人数
生活環境	1
合 計	1

表20 その他

内 容	人数
外部機関との連携	1
合 計	1

4. 考 察

小学校以外の校種の教員は参加人数が少なかったため、母集団が少ない。従って今回の調査では教員のストレスの傾向の全体像を捉えることは困難である。しかし、ある程度の傾向は示唆できると思う。

(1) 共通するストレス

それぞれの校種に共通するのは「児童生徒」に関するストレスが最も多いことである。「不登校・不登校傾向」の問題も共通して見られる。しかし、そのほかの内容は校種によって違いが見られる。これは子どもの発達段階が異なり、問題が異なるためであると考えられる。「教員」に関するものでは「連携」についての記述がそれぞれの校種であった。現場では「学級王国」という言葉があるが、これは、自分の仕事や学級経営について、他人の意見をあまり取り入れようとしない傾向があるということからきている。しかし、一方で何か問題が起こったとき、他人からの意見を取り入れることの重要性もよく言われている。教員の同僚との関係は一般勤労者とは異なり、独立性の強い横並び構造である。これは、自由度は高いが、その反面、孤立・阻害を起こしやすい人間関係といえる（中島 1998）。校内にうまくコーディネートできる教員や、相談できるシステム、組織があれば、「連携」の問題は解消できるように思われる。そして教員自身が自分の問題を自分だけで解決しよう、人に相談するのは恥であるといった考え方を捨てることも必要だろう。

また、教員を取り巻く人間関係は、児童生徒だけでなく、保護者、同僚を含めた「重層的人間関係」（中島 1998）といえる。何か問題が生じたとき、児童生徒に関わると、必然的にその背後の同数かそれ以上の保護者と関わりを持つことになる。「個性重視」「ゆとり」という観点が現場の教育に取り入れられ、保護者の考え方も個性化を重視するようになってきた現在では、集団教育が非常にしにくい状況である。保護者はわが子の個性を主張するが、子どもの気

持ちを重視するあまり、つらい経験や、苦手なことからは子どもを遠ざけようとする。一方学校側では、集団教育や、社会性を子どもに身につけさせようと、ある程度の我慢を強いるようなこともある。そうすると、子どもはやる気をなくし、保護者はやる気をなくしたわが子を見て、学校をバックアップするどころか、批判するようになる。このような状況の中で、「個に応じた」対応をしようとする、ある子どもや保護者の意見を取り入れれば、他の子どもや保護者の立場が立たない、ということが生じる。教員は子どもからも保護者からもストレスを受けるようになる。「個性」についての具体的な説明を欠き、一部の主張する「個性」を曖昧なうちに否定しながらも、現実には許容してしまうというような優柔不断な態度をとるとすれば、必要以上に学校への不信感を増長させることにもつながる。受け入れる用意がない「個性」に対しては厳格に拒否する姿勢を予めとるべきである（佐々木 1997）。

問題に対して担任だけで対応しきれなくなれば、養護教諭や他の教員、時には校長や教頭など管理職とも連携しないと行けない。しかし、連携が困難となる原因がいくつかある。教師集団は専門職の集団だが、学校の組織は階層が単純で単層構造である。校長以外は本質的に第一線で子どもを教える者である。そこで自分が責任をもって担任する学級や教科の「王国」に籠もり、そこで立派な指導を実践することに専念して、他者と没交渉的な状況を作りやすい。また、学校外との接触も少ないので、職務が固定化し、閉鎖的になりやすい（岸田 1991）。子どもや親のことでストレスを抱えるだけでなく、さらに同僚や、管理職からもストレスを受けることになってしまう。

学校教育の抱える問題の多くはいわゆる構造的な問題であって、その解決のためには学校組織の問題にまで踏み込むことが必要と考えられる（吉田他 1995）。つまり、児童生徒や、教員、保護者との関係から生じるストレスは、学校現場という特殊な、閉鎖的な状況から生じており、それぞれの関係が複雑に絡み合っているためだと考えられる。

(2) 校種別のストレス

小学校の教員は20%が保護者に対してストレスを感じている。他の校種はそれほど多くはない。これは小学校が一番多く保護者と関わる人が多いからだろう。また、学校は公共性を培う場であるが、家庭は個人主義を守る役割があり、この差が教員と親の考え方のズレの原因になる（教師の心理(2)）ためだとも考えられる。養護教諭は他の教員たちと比較すると教員に対するストレスを感じる者が多い。これは、担任と子どもの見方が異なり、子どもの立場に立つことで他の教員と意見が異なったり、教室に入れないうちの子どもの受け入れ、サポートしていく際に担任の指導を厳しすぎると感じたり、教員との人間関係に気を遣ったりする場面が多くなるからだろう。

児童生徒の発達段階の観点から見ていくと、小学校では「特別な支援を必要とする子」の割合が最も大きい。中学校や高校では母集団が少ないので断定はできないが、ADHDのような多動の児童は思春期を迎えるころから落ち着きを見せるためだろう。

小学校高学年の思春期を迎えるころから「女子の集団」についての悩みが見られる。女子が閉じられた人間関係を作りたがる傾向があり、指導もしにくくなる。

また、小学校では「思い通りにしないと気がすまない」、「偏食」、「服装」など、しつけやマナーといった行動が見られるが、中学校や高校などの思春期になると、問題行動、喫煙など、反社会的な行動も見られるようになる。

以上のことから校種による違いというより、児童生徒の発達段階に応じて問題は変化する。

それにあわせて教員も対応を考えなくてはならないので、校種によって悩みも変化するのだろう。また、小学校の時には保護者が子どもの盾となって教員に「個性」の主張をするが、成長するにつれて自分から主張できるようになり、第2次反抗期などとも関連して、教員のやり方に反発することもあるのではないか。

(3) 今後の課題

日本の教員で「生徒指導に自信がある」と答えたものは6%に過ぎないとの報告がある(朝日新聞 2003.9.23)。学校を取り巻く社会の変化とそれに伴う価値観の変化、学校のシステムの変化、子どもの変化など教員を取り巻く環境は大きく揺れ動いている。教員に対する見方も決して好意的なものばかりではなく、厳しいものも多い。教員がストレスを感じる状況が多くある。何も教員だけがストレスを多く感じる職業であるわけではないが、教員の仕事は生徒指導、学習指導、校務分掌、学級事務、保護者や地域の人々との対応など多岐に渡る。子どもの事故や人間関係のトラブル、保護者からのクレームの対応など、不測の事態も度々起こる。このように多忙な中でも授業や生徒指導などで専門性を高めていくことが、子どもや保護者への対応がスムーズにできるようになる早道ではないだろうか。教員同士の連携や協力による研修体制の充実化、研修への意識向上なども必要だと思う。また、学校のシステムの改革、社会の教育や教員に対する意識の改革なども必要ではないか。だが、教員自身がストレスを感じることに對して、自分自身の指導で改善できる点がないか考えたり、他の教員や関係機関と協力したりすることで改善できることも多々あると思う。学校はストレスの要素が複雑に絡み合っていて、社会に完全に開きにくい場であるが、教員が不必要に問題を抱えすぎないように、周囲に働きかけていき、ストレスを抱えすぎないようにすることが大切ではないか。問題のすべてから手を引くというわけではなく、より自分自身の資質向上のために努力していく必要性はあるが、自分の限界や、できる範囲を自覚し、また、他の教員にも同じように限界があることを理解し合い、助け合うように意識を変えていくことが重要な課題であると思われる。

引用・参考文献

朝日新聞 2002年9月22日付

朝日新聞 2002年10月23日付

朝日新聞 2003年9月23日付

佐々木 賢 2002 「教師の悩みから教育を読む」軍縮問題資料 255、2002、58-63

諸富祥彦 2002 「子どもよりも親が怖い カウンセラーが聞いた教師の本音」青春出版社

大原健士郎 2002 「職員室」の心の病 講談社

石戸谷哲夫・門脇厚司・永井聖二 1978 「日本の教員文化の実証的研究—教員の類型設定を手掛りに—」筑波大学83-109

岡坂慎二 1991 「閉ざされた空間—職員室」児童心理 45(6) 24-32

横場園子 1990 「教師がおちいる罠」教育 526 70-79

前田 嘉明・岸田元美監修 1986 「教師の心理(2) 社会の中の教師理解」有斐閣

中島一憲 1998 「教師の「登校拒否」はなぜ増えているのか」児童心理 1998 12月号増刊118-123

岸田元美 1991 「教師間コミュニケーションの活性化」児童心理45(6) 42-51

吉田俊和・佐々木政司・栗林克匡・藤田達雄・松原敏浩 1995 「学校組織の社会心理学研究

今の現場教員は何にストレスを感じているか？

(I) 名古屋大学教育学部紀要 42、1-15

佐々木 司 1997 「個性重視」に関する批判的検討」山口大学教育学部研究論叢 47、83-95

麻生誠・小林文人・松本良夫編 1986 「学校の社会学—現代学校を総点検する—」学文社